

2019 年 6 月 16 日（日）「ふれ続けるべきもの」

マタイ 24:23-28

23 そのとき、『そら、キリストがここにいる』とか、『そこにいる』とか言う者があっても、信じてはいけません。24 にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。25 さあ、わたしは、あなたがたに前もって話しました。26 だから、たとい、『そら、荒野にいらっしゃる』と言っても、飛び出して行ってはいけません。『そら、へやにいらっしゃる』と聞いても、信じてはいけません。27 人の子の来るのは、いなづまが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。28 死体のある所には、はげたかが集まります。

【序論】

今日は与えられたテキストから「異端」について考えてまいりたいと思います。キリスト教は常に異端と戦いながら歩んできました。「異端」という言葉自体が差別的だと逆に批判される場合がありますが、キリスト教の性質上、「異なる教え」は区別せざるを得ないのです。聖書の真理は一つであり、それゆえ脇道に逸れると「異なる教え」になってしまう。ある部分においては共通項をもちながら、ある部分では違うことを教える。同じ言語を用いながら、意味も内実も異なっていることがある。外観も中身も似ているため、その違いを見極めるのが難しい場合もあります。また、自分たちの教会が異端に陥っていながら、それに気づかないでいることもある。自らが異端でありながら、正統的な信仰を異端と呼び、攻撃することもあるのです。現在でも異端は世に溢れておりますので、十字架が付いていればどの門をくぐってもよいわけではありません。その語っていること、行なっていることをよく見極めなくてはならない。また、それと同じくらい、自分自身を吟味することも重要です。心を引き締めて、主イエスが教えておられることに耳を傾けてまいりましょう。

【本論】

本論 1. 異端の特徴

そのとき、『そら、キリストがここにいる』とか、『そこにいる』とか言う者があっても、信じてはいけません。(24:23)

24 章では、一世紀の近未来の出来事と、世の終わりの出来事とが、やや区別しにくい描き方がされています。現代の読者にとっては少なくとも 2000 年の開きがあるのですが、当時主の御言葉を直接聞いていた弟子たちにとっては、両者は二つで一つのことであつた。それゆえに、切迫感をもって「世の終わり」のことを聞いたのであります。

「キリストがここにいる」「そこにいる」と訳し分けられていますが、原文では同じ言葉が使われています (ὁδε ὁ Χριστός) (ὁδε)。新共同訳のように「『見よ、ここにメシアがいる』『いや、ここだ』」と訳すとよいでしょう。あちこちで「メシヤはここだ!」という声が聞こえてくるのであり、少なくともそのどれかは嘘だということになります。苦難の中にある人々はなぜこんなことを言うのか。それは、苦しみから解放してくれる人を切望するからでしょう。危急の状況にあつては、人間は希望と見えるものに飛びつく傾向がある。ここが安全だと聞けば行くし、ここに救いがあると聞けば藁をも掴むように握りしめる。しかし、主イエスはそのような言葉を信じてはいけないと言われます。

にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。(24:24)

「偽キリスト」「偽預言者」が次々と出現する。神から遣わされてもいないのに、自分は神の啓示を受けたとか、神の託宣を預かっている、あるいは俺こそメシヤだとまで言い出す。周りの人間にもてはやされてそのようなことを言っている場合もあれば、神ならぬものの声を聞いてそのように思い込んでしまっていることもあります。このような大胆な主張は、見分けることがさほど難しくはありません。なぜなら、その人のやっていることは強烈な自己顕示であり、権力の追求と深く結びついているからです。十字架にまで降り給うた主イエスの姿と比べれば、その道が正反対であることはすぐに分かるでしょう。しかしながら、教会は「カルト」に突き進んでいくことが少なくありません。牧師の権威が強くなり、信徒が食べ物にされていく場合があります。まるで主人と奴隸のような関係がつくられ、牧師は「俺はキリストの代理だ、化身だ」と言って権力を誇示する。こうなってくると、その教会は「偽預言者」に君臨されている危険性があります。「大きなしるし」「不思議なこと」に人は欺かれやすい。実際に、異端的な教会では、驚くべき奇跡が行なわれることもあり、それを見ると人間は驚嘆し、その人を信奉してしまうのです。しかしながら、奇跡そのものは神の活動であることを保証するものではなく、実際には悪魔の力による場合さえあります。

本論 2. 真理の鑑定

異端について、もう少し詳しく学んでおきましょう。カルトの場合、教会は目に見え

て病んでいきますので、あるところで「これはおかしい」と気づく人が大抵出てきます。しかし、微妙な思想的異端の場合、なかなかそれに気づかないことが多いのです。キリスト教史に興った異端の数々を簡単にご紹介します¹。

- ・ 1 世紀の終わり：「グノーシス主義」がキリストの受肉を否定。
 - ・ 2 世紀前半：「マルキオン」が、旧約と新約の神の違いを説き、旧約聖書を否定。
 - ・ 2 世紀後半：「モンタノス」が、聖霊の働きを強調し、再臨と終末が間近であることを熱烈に説く。極度の禁欲主義に発展。
 - ・ 4 世紀：「アリウス主義」「アポリナリオス主義」「ネストリオス主義」「エウテュケス主義」などが、キリストの神性と三位一体の教理を否定。
- 12 世紀：「カタリ派」が霊肉二元論によって聖書を解釈。ローマ・カトリック教会によって処罰される。
- ・ 中世のローマ・カトリック教会は、教会の権威と秩序を乱し、聖職者を批判する者を処罰するという逆異端に陥った。
 - ・ 宗教改革時代：ウィクリフ、フス、サヴォナローラは、教会の権威の上に聖書の権威を置く。ルターは「恵みのみ」「信仰のみ」「聖書のみ」の原理を打ち立てたが、ローマ教会によって異端として破門された。

ここでは詳しく扱えませんが、近年における三大異端として知られるのは、モルモン教（末日聖徒イエス・キリスト教会）、エホバの証人（ものみの塔聖書冊子協会）、統一教会（世界基督教統一神霊協会）。また、最近では韓国発祥の「新天地イエス教証の幕屋聖殿」（通称：新天地）などが問題となっています。

異端を見分けるためには何が必要なのでしょう。それは、聖書の教理や、各時代にまとめ上げられた信条を学ぶことです。異端の一つ一つを知ること大切ですが、より重要なのは「正しいもの」をしっかりと認識しておくことでしょう。その感覚が備わってくると、偽物を嗅ぎ分けられるようになってくる。異端には独特の臭気があります。

「なんでも鑑定団」という有名なテレビ番組がありますが、そこでは様々な人が持っている「お宝」を専門家が鑑定し、値段づけを行ないます。意外なものが高価な鑑定結果を得たり、高価だと思われていたものが偽物で安価になってしまったり、視聴者にとって大変面白い。鑑定士というのは、だいたいその「モノ」を見ただけで、あるいは触っただけで、本物か偽物か区別がつくといひます。そのような感覚はどのようにして身につくかというと、それは本物に触れ続けることによってなのです。福音の真理も本物にふれ続けることによって、偽物を見分ける目が養われます。

¹ 新キリスト教辞典 p. 62

本論 3. 主の来臨は誰の目にも明らか

さあ、わたしは、あなたがたに前もって話しました。だから、たとい、『そら、荒野にいらっしゃる』と言っても、飛び出して行ってはいけません。『そら、へやにいらっしゃる』と聞いても、信じてはいけません。(24:25-26)

主イエスは、偽物は当然出てくるものだと言われます。前もって話しておいたのだから、慌てふためいてはいけない。右往左往し、情報に振り回されてはいけないと。「**荒野**」とは、バプテスマのヨハネが現れた場所でもあり、クムラン教団の人々が隠遁生活をしていた所でもあります。主イエスの昇天後、間もなくして、熱狂的なユダヤ人革命家が「神の靈感を受けた」とふれ込んで革命を画策しましたが、その時にも群衆を荒野に導いていきました(ヨセフス『ユダヤ戦記』2巻13章)。しかし、この計画はローマ軍によって鎮められました。この手の「メシヤ運動」と言われるものは数多く出ましたが、本物は存在しませんでした。

「**部屋**」というのは、「奥の間」「貯蔵庫」という意味の言葉ですが、これは「メシヤは権力を掌握する時まで隠れている」という思想が当時ユダヤ人の間に広まっていたことを背景としています。何か、特別な知恵をもって世に出てくるイメージでしょう。しかし、主イエスはそれも信じるなどと言われます。真のメシヤの出現は、人々が「あっちだ」「こっちだ」とふれ回り、探し回るまでもなく、誰の目にも一瞬で分かる形で訪れるからです。

人の子の来るのは、いなくが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。(24:27)

「**稲妻**」を見たことのない人はいないでしょう。あの恐ろしい閃きは、見る人の目に強烈に焼きつきます。それがどこにあるかと問う必要もないほど明確に、地を照らします。主イエスの出現も同じように、誰にでも分かる形で訪れる。この方こそ真のメシヤであることを悟れない人はいない。それほど栄光を帯びて主は来られるのです。それは、信じる者にも信じない者にも明らかである。しかし、その反応の仕方には違いがありません。信じる者にとっては救いとなり、信じない者にとっては審きの訪れとなる。

死体のある所には、はげたかが集まります。(24:28)

この表現はやや解釈が難しい。「死体」とか「秃鷹」とか、あまり気持ちのよい内容ではありません。これは当時の諺であり、秃鷹が飛び交っているところには大抵死体があるように、主イエスの到来もすべての人の目に明らかになるということが言われているようです。ここに漂う「死」の雰囲気は、「審き」を暗示しているでしょう。信じなかった者にとって、主イエスの到来は恐ろしい日となる。

【結論】

今日は、異端的な教えに振り回されないように、真理そのものをしっかりと学び続けるべきことを語らせていただきました。これは、言い換えるならば、霊の目を醒ましていくということであり、主イエスと交わり続けることであり、聖霊の火を灯し続けることでもあります。他にも色々な表現の仕方ができるでしょう。私たちは、キリストがただ一人のお方であり、この方の語られたことは真理であると信じています。それゆえに、キリストをしっかりと見つめ続けるならば、偽物に惑わされることはないのです。主イエスがどういうお方であるかを知っている。それは、普段からこの方とふれ合っているからです。福音に生き続けるために、最後に『ケープタウン決意表明』から「10 の信仰告白」を紹介させていただきます。

- ①私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛してくださったからである
- ②私たちは生ける神を愛する
- ③私たちは父なる神を愛する
- ④私たちは子なる神を愛する
- ⑤私たちは聖霊なる神を愛する
- ⑥私たちは神の言葉を愛する
- ⑦私たちは神の世界を愛する
- ⑧私たちは神の福音を愛する
- ⑨私たちは神の民を愛する
- ⑩私たちは神の宣教を愛する

【祈り】

唯一なる神よ。あなた以外に礼拝されるべき存在はありません。多くの偽物が世に蔓延っています。巧妙な仕方です。神の教会に入り込むものもあります。私たちが信じていること、語っていること、行なっていることの一切が真理に基づくものでありますように。そして、主イエスにふれ続けることによって、正しいものに対する感覚、異端を瞬時に見抜く目を養っていくことができますように。私たちの霊の目を常に醒まさせ、見るべきもの、ふれるべきものを教えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

唯一にして、真理そのものであり、崇めらるべき、父なる神の愛。

聖徒の霊の目を醒まさせ、見るべきもの、ふれるべきものを悟らせ給う、主イエス・キリストの恵み。

本物に対する感覚を研ぎ澄ませ、偽物を瞬時に見分けさせ給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。